# 岡山県知事賞（高校・最優秀賞）

新聞感想文の部

## 沈黙の力

岡山市・朝日高1年　佐藤　玲菜

何も語られなくても心にズシリときた。朝刊でこの記事を読み衝撃を受けた。全体的に重苦しい雰囲気で朝の清々しい空気とかけ離れているのに不思議と目が離せなくなった。

一般的に子供というものは無邪気であるというイメージがある。だから、手足を縛られて顔をゆがませ、何かを我慢しているような顔で本の前に座っている姿は心に重く響くものがあると思う。

この写真を撮影した劉霞さんは政治上の問題から自宅軟禁されている。彼女の作品に政治表現は一切ないにも関わらずである。憲法でも保障されている為、私達の国日本で「自分は国に表現の自由を侵害されている」と感じることはほとんどない。感じたとしても裁判所に行けば法に基づいて守られる権利だ。戦前までは全く保障されていなかったこの権利が今はごく当たり前のこととしてとらえられていて特にありがたいと思う人は少ないように感じる。私自身、何かの強い阻止を振り切ってまで自分の表現をすること、またそういうことが許されている幸運を特に感じたことはなかった。私の周囲の友人についても同じで社会的問題をテーマに熱く議論をたたかわせるという機会も持ちにくい。その状況に特に何も感じていなかった。

手足を縛られ、身動きがとれず、辛そうで悔しそうな顔で座っている「醜い子供たち」。縛られても最後まで屈しないという強い意志も感じられる顔が劉霞さんの心をそのまま表現したかのような人形は私達が持つ表現の自由という権利の重さを改めて実感させてくれた。その当たり前に手に入る権利を当たり前に受け取っていた自分を恥ずかしく思った。この気持ちを忘れないようにしたいと思う。

調べてみると、現在多くの社会主義国で言論の自由が十分に保障されていないそうだ。この問題は深く考えるとプライバシーや国家の在り方にも関係するため多様な意見があり、これがいいと決めるのは難しいと思う。しかし、私は、表現の自由は絶対に保障されるべきだと思う。この写真のように心に直接訴えてくる「声」もある。しかしそういう「声」が一人一人の異なった思いや考えが、本当の「声」となって響くようになればいいと強く感じた。

沈黙の力。声なき声が私も含めた多くの人の心を動かしている。この問題はまだずっと解決に時間がかかるかもしれない。一人の高校生である私にはこの問題を解決できるような力はないけれど、友達や家族と話し合ったり、より多くの情報を集めたりして意識していきたい。いつか、きっと、沈黙が破られると信じて。

---

視点

### 劉霞「沈黙の力」

## 孤独と絶望が生んだ作品

東京と京都で、かなり貴重な写真展が開かれ、話題になっている。中国の写真家、劉霞による「沈黙の力」である。同名の写真集もフォイルから刊行。貴重というのは、広く開催日に触れる可能性があるめったに作品だったからである。

作品に興味に意思するのは、本人が「醜い子供たち」と呼ぶ人形たちだ。人形といっても、口がゆがんでいたり歯間にしわを寄せていたり、いわゆる子供らしいかわいらしさはあまり感じられない。しかも、たおいなく遊んでいる様子もなく、鳥かごに閉じ込められていたり、開いた本の前で全身を縛られていたりする。

暗いトーンのモノクロームの写真であることも手伝って、全体に重く不穏な雰囲気が漂う。そこにさまざまな抑圧に耐える人間の姿を重ねてみることもできる。

彼女は写真家だけではなく、詩人や画家としても活動している。中国の伝統的な表現に根ざしながら、表現の自由が根拠を示されないまま自宅軟禁され、外界との接触手段を奪われている。そうした絶望的な状況のなかでも彼女はひたすら絵を描き、詩を書き、写真を撮り続けている。

今回展示された作品群は、衛星的に中国国外へ持ち出された後、11年にフランスで初めて発表されると大きな反響を呼び、すでに世界10カ所以上で展示されている。想像を絶する孤独と沈黙の中で作り出された作品は、まるで本人の代わりのように世界を回り、人々の心を動かし続けているのである。

「醜い子供たち」は作者夫妻を表しているとされるが、中国に留まり世界各地で圧政や弾圧に苦しんでいる無数の人々のことでもあるだろう。だからこそ、まずはこの作品の「沈黙の力」にじっくりと耳を傾けてみてほしい。

（竹内万里子・写真評論家）

＝随時掲載＝

◇

「沈黙の力」京都展は京都市上京区のフォイル・ギャラリーで開催中。23日まで。

『沈黙の力』より（©劉霞）

2013年6月21日付　山陽新聞

---

**寸評**

文化面に掲載された一枚の写真から、想像力を羽ばたかせ、表現の自由について静かに考察しています。「沈黙」をキーワードに、優れた文章力で、世界を取り巻く状況を浮かび上がらせています。